

イエメン古代史—6—

7-ヤドウ・イブ・ディブヤーン・ヤフルジャブ・ブン・シャフル

アルブライトは、彼をカタバーン王朝の最後の神官であり、最初の王であると見做している。(注 15)

(注 15) : 「精選」第 2 巻 P.183

そして彼は数多くの碑文を残している。その中にはカタバーン王朝の最初の首都であるタムナウの町の南門の外で発見された碑文がある。そしてまた (グラッセル 1600) と番号付けられた碑文がある (注 16)。そこにはイブ・ヤドウ・ディブヤーン・ヤフルジャブ・ブン・シャフルはカタバーン王朝の神官であり、そしてアムムの全ての子孫達はカタバーン王朝と (国家が形成される前の) アウサーンそしてドゥサイナ地方のカッハド・アンナーゼル、ダハス (ヤーフィウ)、タバナー・ラヘジュにいて、彼等は道を開き、ブルムとハルブ (フライブ) の両処の間にマブラカを建設した。そして彼等はワッド神とイシュタル神の神殿を新しくした。(この碑文は) カタバーン王朝とマアイーン王朝の数多くの神の名称を述べている。

(注 16) : 「精選」第 2 巻 P.188

ジャワード・アリー博士は付け加えて述べている (注 17)。「そしてその碑文は重要で危険な工学的な作業を語っている重要な公文書である。それは荒涼とした地域や山の大地における山岳路を切り開くものであった。つまり作業は大地を舗装しそれを整え、そして巨石を穿つ出来事や、道を通すためにトンネルを開ける必要があった。

(注 17) : 「精選」第 2 巻 P.189

そして別のテキスト (注 18) においては「彼は荒涼とした山岳地に道や隘路を切り開いた。そして通行人が通れるトンネルを掘った。」と記述されている。

(注 18) : 「精選」第 2 巻 P.190

想像可能な事には、このトンネルがアデンにあるホダイド山に今日まで存在しているものであろう、と言う事である。

(P.171) 周知の如く、アデンはカタバーン王朝の中心地であった。そしてホダイド山のトンネルは、車が通行し、歩行者達が横切って行く大きな 2 本のトンネルに匹敵するのである。そして 2 本のトンネルの間には 2 つの山の間の開かれた大地があり、その 2 つが共にホダイド山それ自身の一部なのである。

カタバーン王朝の神官であり、王であるヤドウ・イブ・ディブヤーン・ヤフルジャブ・ブン・シャフルに帰着する諸碑文 (注 19) の中には、ワーディー・バイハーンにある険しいマブラカの道を切り開き、そして舗装した事を語る碑文がある。恐らくそれは前述の (グラッセル 1600) と番号付けられた碑文が指摘する道の事であろう。

(注 19) : 「精選」第 2 巻 P.192

ウエンデル・フィリップスは (注 20) このマブラカの山道を描写して次の様に言った。

「我々は或る時は動物に乗り、また別の時には歩いた。我々がそこに深く入って行く程、我々の驚嘆が倍加する山道を通って行った。それは正にワーディー・バイハーンとワーディー・フライブの間にある人間が実際切り開いた産業道に匹敵するものである。この山道は、(3 メーターに達する) 高さの壁が、小丘陵の様に危険な傾斜角で建設され 1 0 0 0 フィートも続くのである。そしてそれには外側から保護のために

舗装された壁がある。一方山道は、その幅が15フィートから12フィートであり、小さい石で舗装されている。その(山道の)一部は、激しい傾斜の場所で階段状になっている。我々が高台に上った時、そこは最も危険な傾斜地であったが、我々は下方に切断されていない石を見た。我々は長い時間深い考えに耽った。つまりマブラカの回廊(マブラカの山道)は時代の経過と共に、幾多の道路の間を連結したリンクなのであった。そしてそれはそれを仲介として、東部の物資が西部に到達し、駱駝の蹄や脚がそれを運搬した主要道の一つと見做されていた。

(注20):「ビルキースの宝物」P.186

そして彼は付け加えた。「カタバーン王朝の人々がこの険しい山岳路を切り開いた動機、それはジャワード・アリー博士がそれに関して述べた様に(注21)、そこを通行する商隊を支配し、密売を防ぐためであった」。それから彼は次の様に言っている。「明らかな事には、彼(ヤドウ・イブ・ディブヤーン)をして、(P.172)高地や山岳地帯に道を切り開き、トンネルを掘り、道路をアスファルトで舗装する事を敢えて行わせたことは、平原地帯に延びる道路に彼が安寧していなかったからである。即ちそこは敵の容易な標的であった。つまりもし彼の軍隊がそこを通過しようとしたら、侵略軍に攻撃をされてしまい、その折には自分自身を守ることが難しくなってしまうのである。一方彼が建設した道路は、たとえ険しくそしてそこを通過することが困難でも、安全である。何故ならばそこは彼の統治に従属する土地を通っているからであった。そしてそこは平地を通る道路より距離が短かった。それからそこを防衛する事は、開かれた道路を防衛するよりも容易であった。つまりこの戦争に関する思考によって、彼がその道を切り開く事を敢えて行ったのである」。

(注21):「精選」第2巻P.191

ある研究者達は(注22)カタバーン王朝の王権はこのヤドウ・イブ・ディブヤーンの時代に拡大した、と見做している。つまりアウサーンとカタバーンとムラードの全てを併合するようになり、果てはサバアとの国境まで到達した。そして彼の土地の保護の為に、彼は障壁を構築し、そして丘陵と山々に道を切り開いた。それは彼の敵達との戦闘の為に行動する際に、容易に彼の軍隊を移行させる事を可能ならしめるためであった。そして彼の敵が彼の王国に忍び寄る事を防ぐ為に、彼はそれ(障壁)を彼の土地の北と南に作った。カタバーンの北と南にあるこの彼の征服地を表現して、「アイマナンとアシュアマン」と言う文章を彼は使った。即ち「南の人達と北の人達」の事である。そしてそれは、彼の手によって成し遂げられたこの拡張を表現する称号でもある。「南」の意味「ヤムナン」と「北」の意味「シャーマン」の使用は、未だにイエメンにおいて今日まで存在している。恐らくそれは南にあるイエメンの位置と北にあるシャーム(大シリア地方)から取られたものであろう。

(注22):「精選」第2巻P.191

ヤドウ・イブ・ディブヤーン・ブン・シャフル王には非常に重要な側面を持つ公文書がある。(注23)何故ならばそれはカタバーン王国で使用されていた刑法の一つであるからである。のみならず、実際には世界的な法律文書の一つなのである。それは我々に、紀元前の南アラビア人達の元における立法の基本と法律の発布の方法を示している。その中には近代の立法の精神があり、法制化の哲学がある。そして我々に、王が国家の最高見解帰着者であることも示している。彼のみが法律の発布とその告示とその実行の命令の権利を持っている者なのである。そしてまた我々に国民の会議、それは「ムズワード」と呼ばれる会

議の事であるが、諸都市の代表者達や諸部族と諸氏族の族長達から構成されていた。(P.173)それ(ムズワード)は法律を提案するものであり、条例の法案を制定するものであった。つまりもし議会がそれに同意すれば、それに署名し、王の意思もしくは王令という形式で公布する為に、王にそれを上申したのである。また人々が王令の諸裁定を検討し、それによって活動するためでもあった。

(注 23) : 「精選」第 2 卷 P.192

この公文書、それは意図的もしくは過失の殺人に対する刑罰に関する法律である。ある人間を負傷させ、あるいはそれが個人において苦痛や障害を引き起こす可能性のある負傷をさせた者が負わねばならない刑罰に関するものであった。

この公文書から明らかになることは、カタバーン王朝の人々はこの時代の「ラドマーン人」を支配していた、と言う事である。ラドマーン行政区はその当時のイエメンにおける重要な行政区の一つであった。これはその(勢力)範囲上での部族的統一を維持していた為のことであり、この事がその重要性の秘密なのであった。そして現在のワアラーンの場所がラドマーン行政区と見做されている。ラドマーン行政区の諸地域の中には、ラダーアとキダールがある。ここはワアラーンに近い場所である。そして既にワアラーンの名前は幾多の碑文に記述されている。即ちワアラーン・ズー・ラドマーンとかワアラーン・ズー・ラドマーンとして記載されている。

フィルビーの意見における空白がある。ヤドゥ・イブ・ディブヤーンの子供達の内の誰が支配していたかわからないためである。

8-シャフル・ヒラール・ヤフナアム・ブン・イップ・ヤドゥ・ディブヤーン (注 24)

シャフル・ヒラール・ヤフナアム王の名前と彼の息子ナプト・アンムの名前は、ナプト・アンム・ブン・ヤクフ・マルクと言う名前の人物が記録した碑文に記述されている。それは、彼の土地や領地を灌漑するために、彼の城塞に井戸を掘った際のものであった。

そしてそれを彼と彼の子孫達の祝福の為に、カタバーンの神の加護と保護の下で作成した。

(注 24) : 「精選」第 2 卷 P.195

シャフル・ヒラール・ヤフナアム・ブン・イップ・ヤドゥ・ディブヤーン王の名前は、また法律の中にも記載されている。(注 25) それはタムナウ即ち首都に滞在する者達とその外に住む者達に対して彼が発布したものである。これは商業を秩序立てる為であり、そして売買における課税を行う政府の権利と商売が行われる場所を規定する為のものであった。この法律には重要な商取引の専門用語があり、それは我々に同時代のものと比較して、商業の立法の根源においてカタバーン王朝の人々の進歩の度合いを見せてくれるのである。

(注 25) : 「精選」第 2 卷 P.196

(P.174)彼の名前はカタバーン王朝の碑文において記載されている。(注 26) それは商業を秩序立て、そして税金の支払方法に関するものである。そしてこの法律は既に彼の時代に発布された。そして出典は法律そのものに言及していない。

(注 26) : 「精選」第 2 卷 P.196

9-ヤドゥ・イップ・ヤヌーフ・ブン・ヤドゥ・イップ・ディブヤーンもしくは他の意見によるとイブン・ズンマール・アリー

フライブにおいて彼の名が刻印された金貨が発見されている。(注 27)

(注 27) : 「精選」第 2 巻 P.185

空白がある。ジョン・P・フィルビーがカタバーン王朝の人々の内の誰が其処を支配していたかわからないためである。

10ー彼の名前はワトル、彼の名前が記述されているテキストには彼の父の名前に言及がない。可能性として (注 28) 彼はサバアの神官であるヤスウ・アムル・ワトルが打ち破った人物であるかもしれない。

(注 28) : 「精選」第 2 巻 P.182

11ーウィルワール・ブン・サムフ・ワトル、彼の名前が記述されているテキストには彼の称号に言及がない。或る研究者達の元では (注 29)、彼はサバアの最初の王であるカルブ・アル・ワトルに従っていた。

(注 29) : 「精選」第 2 巻 P.182

空白がある。フィルビーが、誰が其処を支配していたか分からないためである。

12ーイップ・シバム、彼の名前が言及されているテキストでは彼の父の名前は知られていない。

13ーイップ・アンム・ブン・イップ・シバム

14ーシャフル・ギーラーン・ブン・イップ・シバム

そしてカタバーン王朝は、フィルビーの意見によると、彼の後にサバア王国に併合される。そしてその一部となった。それは紀元前 450 年の事であった。

彼の時代の多くの碑文が発見されている。(注 30) その中には首都タムナウの南門(P.175)で発見された碑文がある。

(注 30) : 「精選」第 2 巻 P.184

これらの事は、カタバーン王朝の刻文や碑文が指し示していて、カタバーン王朝の歴史に影響を及ぼした諸王であることに関しての曖昧さはないにもかかわらず、ジョン・P・フィルビーのリストにその名前が記載されていないカタバーン王朝の諸王がいると言う事である。

彼等の中には、ホームルのリスト (注 31) とアルブライトのリスト (注 32) によると次の人物がいる。ナプト・アンム・シャフル・ヒラール・ヤフナアムそしてズンマール・アリーがいるが、(後者) は彼の父の名前が述べられていない。そして前述のヤドウ・イップ・ヤジャル・ブン・ズンマール・アリーがいる。

(注 31) : 「精選」第 2 巻 P.232 そしてフレッツ・ホームルは「古代アラブ史」 P.101 という書籍の結びの章に記述されている。

(注 32) : 「精選」第 2 巻 P.183

またアルブライトのリスト (注 33) のみによるとビー・アンム・シャフル・ギーラーンそしてダイダウ・ブン・イップ・ヤジャル・ブン・シャフル・ギーラーンそしてザラア・カルブがいる。(最後の人物) の敬称と彼の父の名前は記されていない。そしてシャフル・ヒラール・ヤフクビド・ブン・ザラア・カルブがいる。

(注 33) : 「精選」第 2 巻 P.232

アルブライトは (注 34)、彼はヤフアムもしくはヤフウと呼ばれた館を建てた人物である。これはその廢墟が発見され、彼が都市の南門に土台を作ったものであった。

(注 34) : 「精選」第 2 巻 P.185 (2017/4/3、P.175 下から 5 行目まで)